

# 「未来への希望－若年者で青年団結成一」

岡崎市

老人保健施設さくらの里 通所リハビリセンター

介護士 米津ゆう子

相談員 内山可南子

事務長 墨江 善浩

### 【はじめに】

人は病気や老化によって、これまで普通に出来たことが突然出来なくなった時、その事を受け入れるのに時間がかかり、気持ちがふさいでしまいがちになります。そのため自分の存在価値までわからなくなってしまう方も多いためです。それは若ければ若いほど、悲しさは大きいものだと感じます。近年、利用者の年齢層も幅広くなってきました。私たちは高齢者の中で1日を静かに過ごしている「若年」の利用者に、通所リハビリでの居場所を作り、社会貢献への道を切り開けないかと考え、今回の取り組みを開始しました。

### 【施設の概要】

当施設の通所リハビリセンターは、契約者数 220 名で、1 日平均 70 名～80 名が通所される大規模事業所です。そのうち若年者である 40 代～60 代の方が 21 名利用されており、全員が男性利用者です。

### 【現状と課題】

当施設では、性別や年齢問わず楽しんでいただけるように、日々スタッフがアイデアを出し合いレクリエーションを行っています。さらに、利用者が学べるように専門の講師を招き、ヨガ、陶芸、生け花など、様々な教室を開催しています。しかし、若年者にとっては、やる気を見いだすことが出来ず、積極的な参加が少なく、また、若年者同士の交流もなく、個々に静かに過ごされてきました。

### 【活動内容】

まず、若年者同士の交流の場として、5月に“青年団”を結成しました。

50代～60代の男性利用者6名が青年団に協力してくれました。最初に顔合わせ、自己紹介する時間を設けお互いの存在を知っていただくことから始めました。今後活動予定としている毎月発行のさくら新聞作りと、夏祭りのお神輿を作っていきたいことを伝え、メンバー同士で話していると、お祭りの話などですぐに打ち解けていました。その後の話し合いで青年団の名称を“青年団さくらメンズ”と決定しました。



<青年団メンバーでの話し合い>

新聞作りとお神輿作りは、青年団のメンバーが今まで培った経験や得意なことを生かし、クオリティーの高さの追求と他者に喜んでもらうことをポイントにして取り組みました。

#### ① 通所リハビリセンターの利用者向け『さくら新聞』作り

行事やレクリエーションの様子を紹介したり、さくらメンズの様子や、さくらの里の事を載せる、外部用や家族用ではなく、利用者のための新聞を作る事にしました。アイデア担当、インタビュー担当、行事や季節の写真撮影担当、熱帯魚撮影担当、力仕事担当など、最初は個々の個性が出しやすい役割に就いていただき、6月に第1号のさくら新聞を発行しました。



<インタビューの様子>



<作成した『さくら新聞』>

#### ② 施設の夏祭りに向けてのお神輿作り

新聞作りと同時進行で夏祭りに使用のお神輿制作を始めました。クオリティーの追求により、すべて木で作ると決めました。木の切断、釘打ち、やすりがけ、塗装を手分けし、2ヶ月かけて作り上げました。



<お神輿づくりの様子>



<完成したお神輿>

青年団が作ったお神輿は、その後ご縁があって保育園に贈呈することになりました。当日は、青年団も保育園に行き園児の前で贈呈の挨拶をしました。園児からはお神輿のお礼として踊りの披露があり、その様子は地方テレビにも取材されました。青年団のメンバーからは、「小さい子供たちと関わることが少ないから久しぶりに関わることができてよかった」「子供たちに喜んでもらえて本当に青年団に入ってよかった」と通所リハビリの中でなく地域の方にも貢献することができたことを実感し、いきいきと晴れやかな笑顔で話されていました。



<お神輿を保育園に贈呈>

#### 【まとめ】

青年団の活動により様々な効果がありました。普段、新聞や本を読まれない高齢の方々が目の前に置いてあるさくら新聞に興味を持って読む姿が多々みられました。お神輿作りでは、制作中、のこぎりや金槌の音に誘われて見に来た年配の方からアドバイスを受けるなど、交流が見られました。

今回の取り組みから、青年団が作成した「さくら新聞」を楽しみにしている利用者がいること、自分たちが出来ることを集結し大きなことをやりとげた結果、喜んでくれた人がいたということ、またそれが彼らのやりがいや希望へと繋がっていたこと等がわかりました。現在では、メンバー同士でアイデアを出し合い、次へのやる気を口にされるようになりました。そして、今まで可能性を閉じ込め、何もできないと心を閉ざしがちな利用者にも、自分にもやれることがあるのだと気付いていただき、少しでも私生活でのやる気、そして未来への希望を持っていただけるような活動になったのではないかと、更にスタッフが利用者の個々の能力に気づき、その能力を最大限に生かせるアイデアを出していく刺激になった活動であったと考えます。

今後も“青年団さくらメンズ”の活躍、青年団のアイデアから出た記事、他利用者が興味をもてるような活動を行っていきたいと思います。